「高低差」地形ウォーク第9回

源平　一ノ谷の古戦場を訪ねて　須　磨

2023年6月8日

＜参加メンバー＞　5人（男性3人、女性2人）　　＜天　候＞　曇り

＜コースタイム＞

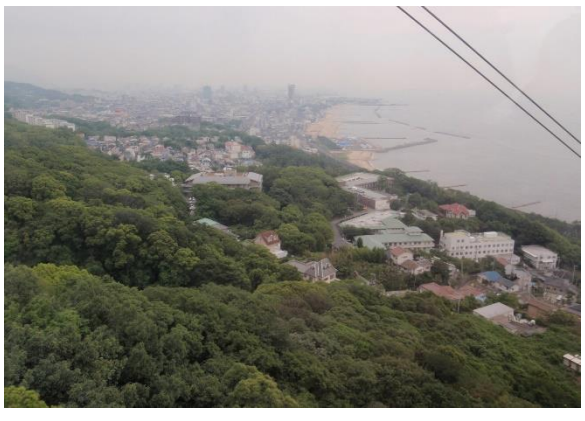
須磨浦公園駅 9：40～9：45 敦盛塚～10：07 鉢伏山上駅(ﾛｰﾌﾟｳｪｲ)～10：18 旗振山～10：35 一ノ谷下山口分岐～11：00 逆落し想定場所～11：18 安徳帝内裏跡～11：33 逆落し想定場所 2～11：40 一ノ谷戦の濱碑～11：50 ベルトコンベア跡～12：00「須磨浦漁船だまり」緑地 12：20～13：00 須磨寺 14：00～14：10 須磨寺駅　　4.5H　8Km

六甲の山並みが西へ向かって高度を下げていき、ついには須磨の鉢伏山で断崖となって海に入る。古来この場所は波打ち際まで崖が迫り往来は険しいため山陽道は北に大きく迂回していた。こんなﾛｹｰｼｮﾝのため「すま」は畿内の「すみ」から転じたとも。世に知られる源平一ノ谷の戦はこの鉢伏山の麓や海辺で繰り広げられ、「逆落し」や「青葉の笛」の物語を生んだ。今回は特に義経の逆落としの場所をこの目で確かめたく、鉢伏山～鉄拐山の尾根道から急坂を下り義経を追体験し、「戦の濱」や須磨寺に遺る「青葉の笛」を見た。須磨ﾍﾞﾙﾄｺﾝﾍﾞｱも神戸市の一大事業の遺産として後世に誇れるものだ。　(Gi)

須磨浦公園駅からスタート

敦盛石造五輪塔

ロープウェイで鉢伏山へ

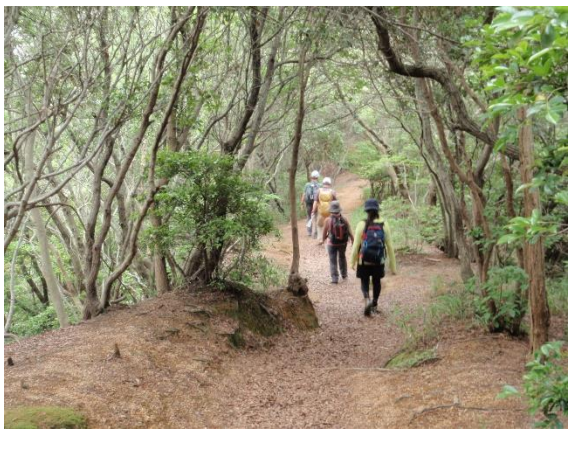

ロープウェイから合戦の場所を見渡す

旗振山

一ノ谷分岐　右へ

分岐の標識

分岐の標石、右鉢伏山　左内裏跡


逆落しへ向かう、義経の進軍路？

逆落しの想定場所

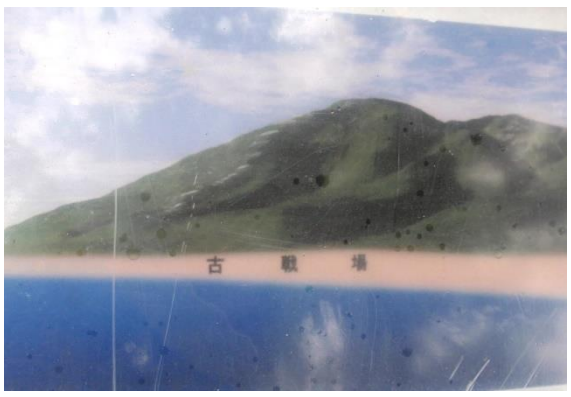
逆落しの想定場所。当時は木が茂っていた？

安徳帝内裏跡伝説地

安徳宮

浜近くの急な崖、ここも逆落しの想定場所。

源平史跡　戦の濱



古戦場の想像図

須磨浦の浜

須磨ベルトコンベア跡の碑が埋まっている

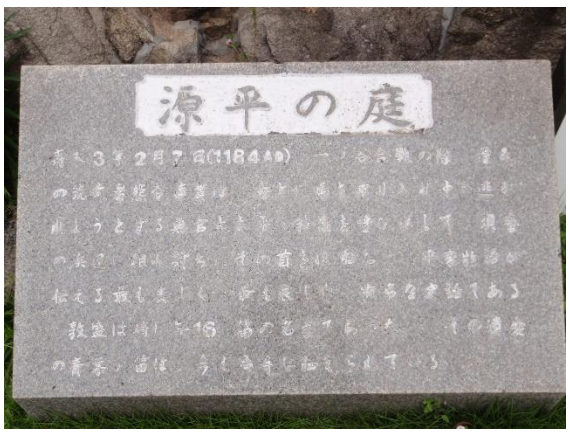
山を削りその土でﾎﾟｰﾄｱｲﾗﾝﾄﾞなどを造成した

須磨浦漁船だまりで昼食

須磨寺三重塔

敦盛塚（首塚）

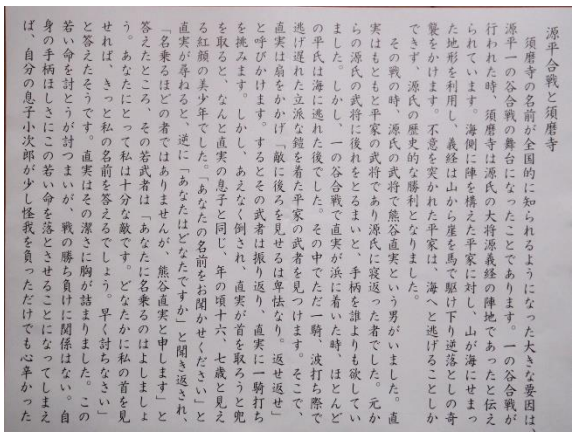
須磨寺本堂



平敦盛と熊谷直実の一騎打ちの場面

平敦盛

熊谷直実



源平合戦と須磨寺

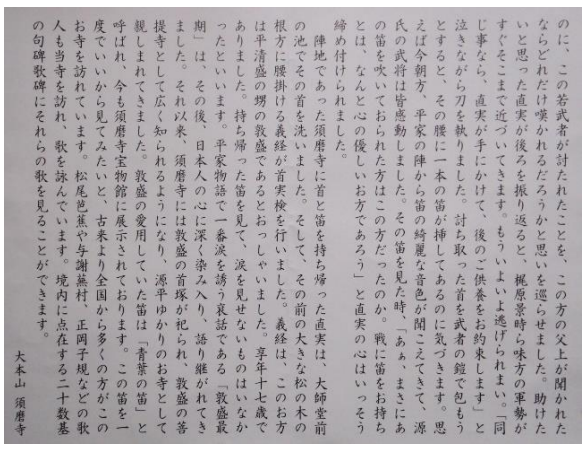
須磨寺の名前が全国的に知られるようになった大きな要因は、源平一の谷合戦の舞台になったことであります。一の谷合戦が行われた時、須磨寺は源氏の大将源義経の陣地であったと伝えられています。海側に陣を構えた平家に対し、山が海にせまった地形を利用し、義経は山から崖を馬で駆け下り逆落としの奇襲をかけます。不意を突かれた平家は、海へと逃げることしかできず、源氏の歴史的な勝利となりました。

その戦の時、源氏の武将で熊谷直実という男がいました。直実はもともと平家の武将であり源氏に寝返った者でした。元からの源氏の武将に後れをとるまいと、手柄を誰よりも欲していました。しかし、一の谷合戦で直実が浜に着いた時、ほとんどの平氏は海に逃れた後でした。その中でただ一騎、波打ち際で逃げ遅れた立派な鎧を着た平家の武者を見つけます。そこで、直実は扇をかかげ「敵に後ろを見せるは卑怯なり。返せ返せ」と呼びかけます。するとその武者は振り返り、直実に一騎打ちを挑みます。しかし、あえなく倒され、直実が首を取ろうと兜を取ると、なんと直実の息子と同じ、年の頃十六、七歳と見える紅顔の美少年でした。「あなたの名前をお聞かせください」と直実が尋ねると、逆に「あなたはどなたですか」と聞き返され、「名乗るほどの者ではありませんが、熊谷直実と申します」と答えたところ、その若武者は「あなたに名乗るのはよしましょう。あなたにとって私は十分な敵です。どなたかに私の首を見せれば、きっと私の名前を答えるでしょう。早く討ちなさい」と答えたそうです。直実はその潔さに胸が詰まりました。この若い命を討とうが討つまいが、戦の勝ち負けに関係はない。自身の手柄ほしさにこの若い命を落とさせることになってしまえば、自分の息子小次郎が少し怪我を負っただけでも心辛かったのに、この若武者が討たれたことを、この方の父上が聞かれたならどれだけ嘆かれるだろうかと思いを巡らせました。助けたいと思った直実が後ろを振り返ると、梶原景時ら味方の軍勢がすぐそこまで近づいてきます。もういよいよ逃げられまい。「同じ事なら、直実が手にかけて、後のご供養をお約束します」と泣きながら刀を執りました。討ち取った首を武者の鎧で包もうとすると、その腰に一本の笛が挿してあるのに気づきます。思えば今朝方、平家の陣から笛の綺麗な音色が聞こえてきて、源氏の武将は皆感動しました。その笛を見た時、「あぁ、まさにあの笛を吹いておられた方はこの方だったのか。戦に笛をお持ちとは、なんと心の優しいお方であろう」と直実の心はいっそう締め付けられました。

陣地であった須磨寺に首と笛を持ち帰った直実は、大師堂前の池でその首を洗いました。そして、その前の大きな松の木の根方に腰掛ける義経が首実検を行いました。義経は、このお方は平清盛の甥の敦盛であるとおっしゃいました。享年十七歳でありました。持ち帰った笛を見て、涙を見せないものはいなかったといいます。平家物語で一番涙を誘う哀話である「敦盛最期」は、その後、日本人の心に深く染み入り、語り継がれてきました。それ以来、須磨寺には敦盛の首塚が祀られ、敦盛の菩提寺として広く知られるようになり、源平ゆかりのお寺として親しまれてきました。敦盛の愛用していた笛は「青葉の笛」と呼ばれ、今も須磨寺宝物館に展示されております。この笛を一度でいいから見てみたいと、古来より全国から多くの方がこのお寺を訪れています。松尾芭蕉や与謝蕪村、正岡子規などの歌人も当寺を訪れ、歌を詠んでいます。境内に点在する二十数基の句碑歌碑にそれらの歌を見ることができます。

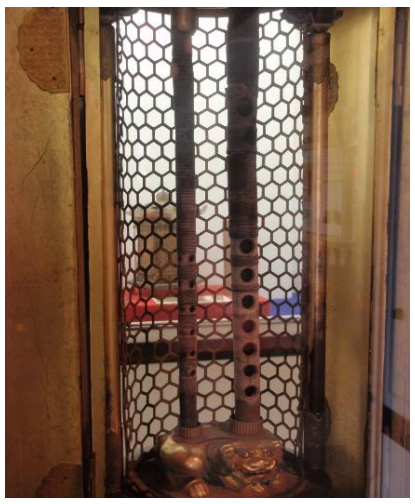
大本山　須磨寺

「源平合戦と須磨寺」解説 1



「源平合戦と須磨寺」解説 2

「青葉の笛」厨子



右「青葉の笛」、左「高麗笛」

「笛の音に波もより来る須磨の秋」 蕪村

須磨寺案内図

仁王門

仁王力士（運慶および湛慶の作）

仁王力士（運慶および湛慶の作）

龍華橋にて、右奥は仁王門

須磨寺駅到着

高倉山トンネル
鉄拐山隧道
鉄拐山
須磨浦公園
鉢伏山
ロープウェイ
鉢伏山上駅
START
須磨海づり公園
一ノ谷町
高倉町（一）
潮見台町（三）
関守町
山陽須磨駅
須磨寺
千守町（一）
須磨浦通（五）
須磨駅
須磨寺駅
須磨本町
離宮前町
桜木町
GOAL
国土地理院